

---

# 音・声・言葉

零・ZA・音

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

音・声・言葉

### 【Zマーク】

Z4933A

### 【作者名】

零・ZA・音

### 【あらすじ】

ある雨の日、事故で聴覚を失った俺は、音のない世界で生きている。静かな世界で、俺はただ毎日を生きている。そんな世界でも俺に聞こえる音　それは、彼女からの思いをのせたもの。

静かな世界。音は聞こえない。  
光は見える。物も触れられる。食べ物はおいしい。

でも、俺には音がない。

自分の声すら、分からなくなつてきた。

### 放課後の教室。

俺は一人、自分の席に座り、ぼんやりと外の風景を眺めていた。グラウンドを走り回る部活の生徒達。賑やかそうな雰囲気だが、何を話しているのだろう。

そんな思考を繰り返していると、俺の肩を叩かれた。誰かと思い、振り返ると

「か・え・る・よ」

俺に見えるように一言一言を、ハツキリと発音している女の子がいた。

女の子の名前は 絵梨<sup>えり</sup>。付き合い始めて1年になる俺の彼女だ。

「……ああ」

適当に返事をして立ち上がった俺に苦笑いを浮かべながら横に立つと、一緒に歩き出す絵梨。

教室を出て廊下を見渡すが、本来なら喧騒が聞こえてきてもおかしくはないのに、俺には何も聞こえない。教室の中にも数人のクラスマイトが残っていたのに、誰一人話す声が俺の耳には届かなかつた。

廊下を過ぎ、下駄箱で靴を履き替え 外に出ても、俺の耳は何も感じない……。

音がない世界。

なんて寂しい世界なんだらうか……。  
きっかけは些細な事。

あの日、俺はバイクに乗つて一人、気ままにツーリングをしていた。雨が強く降っていたのにも関わらず、「自分は事故に遇わないだろう……」そう思いながら、俺は自分の腕を過信していた。

その思いが俺の人生を変えた。

カーブで俺は出会い頭に車と衝突　　それだけならただの事故だ。  
だが、それにはおまけがついてきた。  
嬉しくない、欲しくなんかなかつた。ベットで目覚めた俺はある  
感覚があつた。

音が聞こえない……。

それは静かな場所だと最初は思つたほど。だが、現実は違つた。  
隣で何か叫んでいる母さん。目を瞑り俯いている父さん……そして涙を流している絵梨。

これだけの人間がいるのに、誰の声も聞こえない。頭の中ではみんなの声が響いているのに……聞こえていたはずの声が……。

「ど・う・し・た・の・?」

俺の顔を覗き込むようにして、絵梨が見上げる。その口が言葉を紡いでいるが、俺には聞こえない。

それでも伝わってくる絵梨の言葉。

絵梨と付き合い始めた一年前は、俺は普通の学生だった。

それが一夜でこれだ……。人生なんてどこでどうなるか、分からぬものだ。

耳が聞こえなくなつた原因は、事故で受けた頭部への衝撃。

神経に問題があるらしいのだが、詳しい事を聞いても分からぬ俺は、「治るのか、治らないのか?」を聞いた。

医師の答えは簡単明瞭 耳は完全には治らないらしい。少しは回復するかも知れないと言われたが、一向にそんな兆はない。

当たり前の事が出来ない辛さ……それがこれほどの苦痛だとは思わなかつた。

何も聞こえない事が、これだけ怖いものだとは思わなかつた。音がないだけなのに、俺はここにいる事すら否定されてしまつたような感覺。

世界が変わつた瞬間だつた。俺はもう音のある世界を歩けない。一生このままなんだと実感してしまつた。

もし、俺に子供が出来ても、俺はその子の声を聞く事が出来ない。もし、俺に助けを求められても、俺は助けられない。

もし、もし……これからりを考えて、ノイローゼになりそうな時期もあつた。だけど、そんな世界から救つてくれたのが両親であり、隣で微笑んでいる絵梨だつた。

「……何でもない」

俺は首を横に振り、頭の中にある想いを追い出す。思い出すだけで、どうにも暗い気持ちになる。

結局、俺は一年経つても何も変わつてないのかも知れない。それには新たな不安があるから。

今の俺は、ちゃんと話せているのだろうか。耳が聞こえないそれが俺自身の声さえも、奪つていく気がしていた。

発音は正しく出来ているのか? 俺の声はちゃんと伝わっているのか?

それが怖くて話すのが嫌になつてきていた……。

「な・ら・い・い・よ」

だが、絵梨は俺の考へてゐる事など氣にしない風に、笑顔で話しがけてくれる。

その笑顔は俺を癒してくれていた。

何度も喧嘩をしたか分からぬ。何度も別れようとしたか分からぬ。

でも、その度に、俺達は仲直りをして、更に愛を深めていった……。

「は・る・み」

絵梨が俺の肩を叩いて口が俺の名前を紡ぐ。そして、ゆっくりと俺の手を掴み、大きく空に振り上げた。

「……綺麗だな」

空は赤い絵の具と塗つたキャンバスに黒い絵の具で縁取りをしたような、不思議で幻想的な色をしていた。

夕闇が足元から広がる街並みに、まだ赤く染まる空が俺達までも赤く染めている。

手を振り下ろした絵梨は俺の目を真つ直ぐに見つめているが、その頬が微かに夕日以外で染まっている気がした。

「だ・い・す・き」

両手を広げ、俺を抱きしめてくる絵梨に、咄嗟の事で俺は動けなかつた。

絵梨から伝わってくる鼓動は、少し速いような振動が俺に伝わってくる。音は聞こえない……だけど、鼓動は響いていく。

まるで、”ここにいるみ”と誇示するみつこ……元ひみのよ。

「わ・た・し・こ・は」

絵梨はそこまで言つて一旦、口を噤む。

真つ直ぐと見つめる瞳から、優しい微笑が俺の中に広がり、暖かい心で満たされていく。

「は・る・み・し・か・い・な・い・の」

一音一音、ハツキリと唇がその言葉を俺に告げる。俺の顔に両手を添えて、そして俺の口に重なるもの。

温かく、柔らかい感触。それは絵梨からの気持ち……。言葉に出 来ない思いをのせて俺に伝わってくる。

「俺にも……絵梨しかいない」

今の俺の声はハツキリ伝わっているのか……それが心配だ。だけ ど

「う・ん」

笑顔の絵梨が頷き、俺の思いが伝わっている事を教えてくれる。それが嬉しくて、絵梨を抱きしめていた。驚いている絵梨だが、ゆっくりと俺に腕を廻してくれる。

言葉は聞こえない。でも聞こえてきた

「ずっと、一緒だよ……晴海」

優しく響く……俺の中で、懐かしい音となつて木靈する。

「私は晴海のそばに、ずっといるから……」

温かく響くのは鼓動と思ふ……。

聞こえなくても

伝わる俺達の気持ち。

これが俺達の日常……これが、この先もずっと続く事を願う。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4933a/>

---

音・声・言葉

2010年12月14日20時46分発行